

---

# 旋律は天使の声

櫻川

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

旋律は天使の声

### 【Nコード】

N84110

### 【作者名】

櫻川

### 【あらすじ】

仄かに明るく薄暗い外国の話。

色白の男が舞台でピアノを弾いていた。

オレンジの仄かなライトに照らされたバーの中心。注目という注目を浴びるわけではないが、ひっそりとその姿は異彩を放つ。

伏し目がちの長いまつげが震えるたびに、店内に響き渡る旋律。細く長い指が白鍵と黒鍵の上を滑りながら、いままで聴いたことのない音を奏でた。

ジャズにしては綺麗すぎて、クラシックにしては自由なメロディ。右と左がまったく別のものを弾いているようで、これ以上はないぐらいに重なり合った妖しい調べ。

誰もが視界に男をとらえるものの、連れと談笑して気にも留めない。しかし、そこには確かな男の世界が広がっていた。

「……マスター、彼は？」

初めて聴く曲に耳を傾けながら、目の前でグラスを拭いているマスターに声をかける。するとマスターはほんの一瞬驚いたあと、笑みを浮かべた。

「おや、きみが他人を気にするのは珍しいじゃないか」

楽しそうに目を細めるマスターに、多少の不快を混ぜた視線寄越す。しかしそんな視線を気にすることなく、マスターは微笑したまま「彼は先月からうちで働いてるジャパニーズさ」と答えた。

二ヶ月ほど店に来ていなかったせいで知らなかったが、どうやら男は開店してから閉店するまで、ほぼあそこにいるらしい。二ヶ月前までは有名なピアノリストばかりがああ舞台に立っていたのにも関

わらず、だ。

いったい男は、どうやってあの場所を勝ち取ったのだろうか。あの舞台に立てるピアニストは、国内でも何十人といないのに。

「あいつは　ハインは、どうしたんだ。ハインは、ここで一番の人気だっただろう?」

「ああ、彼は自分から辞めたいと言って辞めたよ。舞台に立つたためなら暴力だって厭わないロニーでさえ、そうだ」

「ハインが自分から?　あいつのプライドがそれを許すのか?　それにロニーなら東洋人の腕ぐらい簡単に折りそうじゃないか」

「それだけのものが、あのジャパニーズにはあつたんだろうね。フイオレ、きみも気づいているんだろう?」

眉根を寄せて訝しげな顔をしていると、マスターは磨ききったグラスをガラスケースに戻しながら首を傾げた。

すべてを見透かしたような態度は相変わらずのよう。俺は無意識のうちにげんなりした顔をしてしまったようで、マスターに笑われてしまった。

だから若干の恥ずかしさを隠すように、アルコールの注がれたグラスを傾ける。ひんやりと滑り落ちてすぐに、喉の奥が炎上するアルコール独特の感覚。吐き気とともに呼び覚まされる快楽に、むずがゆさを覚えた。

「彼、呼ぼうか?」

「……そうしてくれ」

この程度のアルコールで酔えるほど、俺は下戸じゃない。それならこのなんとも言い難い高揚感、どこから湧き上がるものなのだろうか。

マスターがカウンターから出て行き、ひとりになったところで、

前髪を掻き上げ、溜息をひとつ吐いた。

何十年も前からの知り合いは、たったひとりの東洋人にピアノを与えるほど、ぬるい優しさを持ってはいなかったはず。昔は仲間に銃を向けることすらあったのに、この二ヶ月でなにがあったのだろう。

「フィオレ」

思考に浸りすぎていたようで、顔をあげるとそこにはマスターがいた。いつの間にか止んでいたピアノの代わりとして、店内にはレコードの冷たい音楽。言われなくても彼を連れてきたのだろうと思つて左を向くと、そこには微笑んでいる男がいた。

「はじめまして、ケイと言います」

流暢な英語で、ぺこりと小さく頭を下げたケイ。東洋人の発音はどこか癖があり、余所っぽいのだが、ケイの英語は彼の奏でる音楽と似て、綺麗なものだった。

「良い演奏だった。俺はフィオレだ」

態度で座ってくれと示し座ると、ケイは礼を言いながら隣に座る。するとタイミング良く、マスターがケイと俺の前にグラスを差し出した。ピンクと金色に輝くそれぞれのグラスは初めて見るもので、思わずマスターを窺うと、

「特別オリジナルさ。金はとらないから、話が終わったら呼んでくれよ」

笑みを浮かべてそう言われ、マスターは離れていった。

俺はいろいろと勝手なマスターに声をかけようとしたが、隣でくつくと笑うケイを見て開いた口を閉じる。

「面白いかな？」

「ふふ、すみません。マスターがあんな風に笑うところを初めてみたもので。ずいぶん仲が宜しいですね」

ケイは、無愛想な俺を怖がることなく目を細めて笑う。舞台ではどこか翳りのあつた表情が、ここでは見えない。どちらが本当のケイなのかわからないが、もしかしたらどちらも本当のケイなのかも知れない。俺に見せる表情と、ケイに見せる表情が違うマスターのように。

にこにこ微笑んだままのケイにそんなことを思いながら、俺は金色に輝くグラスに口をつけた。すつきりとした味に含まれた熱が心地良い。あとで美味かったと伝えてやろうと思いつつ、カウンターにグラスを置いて、俺は口を開いた。

「あいつはただの腐れ縁だよ。ところであの曲名は、なんというんだ」

無理矢理になつてしまった感は否めないが、マスターの話題をケイの話題に逸らす。マスターの話など、流血の類ばかりだからだ。俺は俺のよく知る数年前のマスターを思い出しながら、訝しまれない程度に恐怖で震えた。

ケイはもちろんそんな俺を訝しむことなく微笑して、

「ああ、僕の弾く曲には名前なんてありませんよ」

なんと言つこともなく、自然にそう言つた。

俺はその異質な答えを不思議に思い、首を傾げる。

「……どういうことだ？ まだ評価されていない曲しか弾かないのか」

「あ、いえ、そんなに大きく考えさせるつもりはなかったのですが……すみません、僕の弾く曲はすべて僕の自作なんです」

再び問うた俺に対するケイの答えは、あっさりしたものであったが、普通、真似できないようなものだった。

舞台上で弾いたあの旋律は、クラシックでもなくジャズでもなく、完全にオリジナルだったからだ。あれが自作なら、ケイ以外が弾くことは出来ないメロディだということだろう。模倣や、生み出されている曲に近い音すらなかったのだから。

「ケイ、あんた、プロのピアニストになる気はないのか？」

「え？ ピアニスト、ですか？」

「ああ、そうだ」

頷くと、ケイは初めて曖昧な笑みを浮かべ、戸惑ったような困ったような、難しい顔をした。

「俺は音楽関係の仕事をしている。ケイなら、プロになれる。この舞台にアマチュアで立っているのは凄いことなんだ。若くてもあれだけ弾けるなら、必ず評価されるだろう」

そんなケイに自信を持たせるよう、俺は普段よりも多弁に話す。

ケイの音楽を地下のバーだけで終わらすのはあまりにも勿体ない。地上に出て通用するだけの力はある。力説するだけの意味だってある。

ケイが望めば、恐らく世界にだって立てるのだから。

俺はケイを見つめ、言葉を待つ。

そして数分が経ち、ようやくケイは口を開いた。

「……僕、若く見えますか？ これでも二十六なんですよ」

と、なにか吹っ切れたように微笑みながら。

本音や確信は後から言うタイプらしく、ケイはプロには一切触れず俺を見る。至近距離で見つめ合ってしまうのも男同士で気持ち悪いと思い、そっとカウンターのグラスに目を落として「俺と六つしか変わらないのか」と答えた。

その言葉にケイは笑いながら、

「こちらでは東洋人を年より若く見えることから天使などと形容するそうですね」

と、言う。

「本国には十代で世界を飛び回る者がいます。この国を含めて世界には、僕のような人間などたくさんいるでしょう」

「そんなことは」

「ない、ですか？ 例え本当に僕のような奏者がいなくても、僕はピアニストには向いていません」

じわり、じわりと、ケイは詰めていく。その先を濁してもいいのに、最後まで言葉を続ける。

「フィオレさん。僕は」

落とした視線の先で氷が崩れた。

「プロにはなれません」



からん。

再びケイに向き直ると、ケイは舞台上弾いていたときのような翳りのある表情をしていた。

「……そうか」

きつと彼の翳りの原因は、これなのだろう。

隠しているつもりの言葉から滲むのは、なりたいたいという思い。黒い瞳の深さはプロへの羨望と、諦めなければならぬ悲しみ。

なにがケイをそうさせているのかはわからないが、なんとなくそうなのだと思った。

「じゃあ、ケイ」

「……なんですか？」

「ケイの曲を楽譜にするのは駄目か？」

「僕の、曲を、楽譜に？」

「誰かに弾かせるわけじゃなくて、ケイの曲を形に残しておきたいんだ。だから」

駄目だろうか？

俺はそう言い、ケイを見つめる。楽譜にすることも駄目だと言われたら、今度こそどうしようかと思ったが、ケイは「僕の曲で良いのですか？」と驚きながらも問うた。だから俺が黙って頷くと、ケイは花のように笑う。

「明日も来る。だから今日は弾いてくれ」

そしてそう言ってうながした俺に従ったケイの指が、鍵盤の上を滑った。

旋律は天使の声。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8411o/>

---

旋律は天使の声

2010年11月11日03時14分発行